

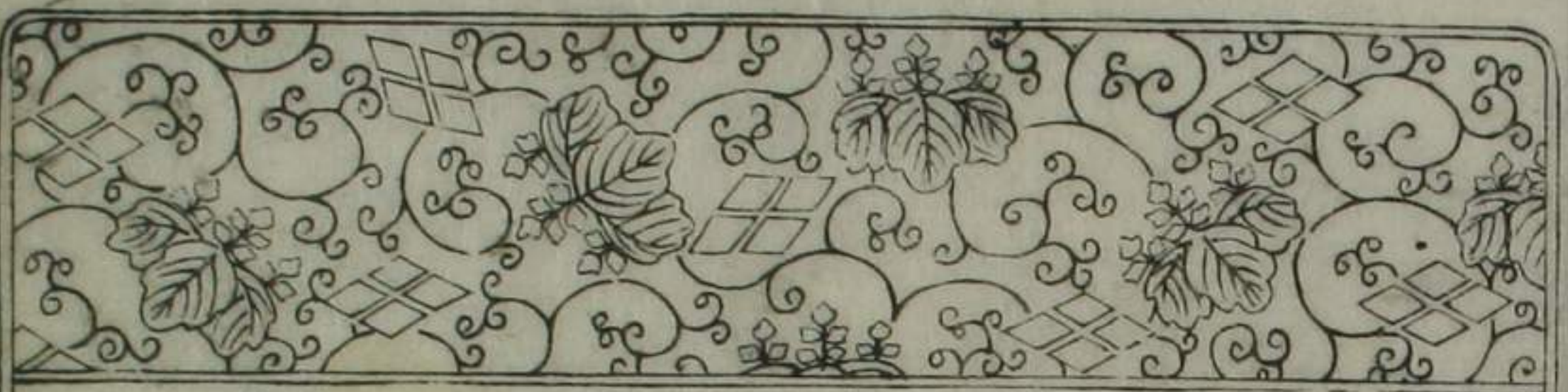
繪本烈戰功記  
後篇  
八

2257  
20



八達 13  
2257  
\* 20

池清



繪本烈戰功記後篇卷之八

目錄

信玄身延山所望之事

身延山守護神出現之圖

上杉謙信出張於長沼并武田勝頼武勇之事

武田小多確執并信玄病氣之事

上杉謙信退陣之圖

信玄上洛出陣并馬場信房武勇之事

武田勢途中壯觀之圖

武田勢途中壯觀之圖

我 あ



繪本烈戰功記後編卷之八

信玄身延山不望事

鬼南而千幸も暮に及び明と云え龜三年とどるけり。初ら  
 武田大信正伝云い。小多家より叡山と焼亡たると云く  
 歎き。王城の鉄固にて。必家の解濟とわろの靈場。一日も  
 毎有べく守として。程々只急ととらえて。先無領公の中放  
 台嶺の法滅と興嗣んをぞつりけれ。時小元龜三年始の正月廿  
 一日小日蓮宗の本寺。身延山。安房強心五郎と侵者にて云  
 送られつる換り。去年九月。小多上総公暴威と震て。叡山と放火  
 吾朝才一の伽藍と一付小灰燼と成事。其後不依伝云。領主は  
 法焼と徒。顯密兼宗の靈地と申。以世安穩の政と礼と致



天の單言...

火の山  
おや

三郎義光より四代の末孫南光六郎実長とて、則武田家一族  
 あり。温厚此長者なりけり。けし人仰くよ人海候て土地と  
 寄附し大檀那と奉て一字と建立してよ人と清光延山遠  
 寺。妙法華院と号。別天竺の靈鷲山と云われり。ころやそ  
 後日朝上人。大伽藍を建立す。ちハ甲府より西の方。九里  
 二十町の西を。まより以来。法嗣連綿して。遍妙法の光  
 を仰の布ちり。ころか。今。博学強記の名僧。信心を  
 二の初者。を直より山とす。す。信の徳輝を。や  
 うすの何世に。今。信云の使者より。貫主の願を  
 等とひく。一山の傍候。大寺小集會と。耳と。信を  
 して。上座の叢云と。結願努。願一山の大事と。ころ

手地。今の身延山。最上人。加小一山と。西を。而也  
 一統承。又。その代して。南。長。法宗の地。宛  
 仍。各。の。如。小。伽。藍。と。建。立。さ。る。の。男。王。多。得。心。ら。ん。き  
 りの世と。な。れ。ば。身。延。の。世。大。又。發。さ。る。先。ハ。什。麼。の。事。も。あ。る  
 信。守。車。と。ひ。も。か。け。ぬ。嚴。令。裁。と。信。果。て。後。う。つ。の。地。を  
 不。知。か。く。て。有。さ。れ。ま。あ。い。ひ。ば。先。上。云。の。お。の。じ。ま。と。數。坊。へ  
 お。函。て。早。く。信。清。と。中。上。ま。り。と。て。使。者。孫。正。方。使。を  
 返。し。ま。り。西。車。又。一。山。へ。船。て。東。洋。定。ま。と。及。び。り。の。林。這  
 身。延。山。の。來。由。と。名。又。甲。及。巨。麻。劫。と。き。井。の。心。の。花。小。高  
 養。丈。澤。と。い。ふ。や。わ。て。ま。け。り。と。人。皇。八。十。九。代。龜。山。院。の。信。守。に  
 信。守。車。と。い。ふ。や。わ。て。ま。け。り。と。人。皇。八。十。九。代。龜。山。院。の。信。守。に  
 信。守。車。と。い。ふ。や。わ。て。ま。け。り。と。人。皇。八。十。九。代。龜。山。院。の。信。守。に

之に留まら

織田

之に依

同小母主の曰。けふ彼の命にて。尚山と云。台嶺小母主の  
 有。經事。右又并て。獻山。燒亡の儀と推小。元來彼  
 山門の流傳。之。城守。護の靈場と功又着て。丹。海。從  
 西。惡。辱の心をなせ。法衣と兼。曹に更て。越。前。の。朝。會。近。江。の  
 法井又同云。小。多。家。又。款。對。の。包。と。あ。り。又。密。よ。尚。國  
 の。彼。武。田。家。又。志。と。通。と。て。佐。玄。公。又。上。洛。と。進。る。の。使。者。救  
 回也。依。之。小。多。家。より。そ。陰。面。と。通。と。去。年。九。月。一。日。又  
 燒。亡。あ。り。と。云。然。が。あ。ら。ぬ。ら。小。多。家。む。り。の。通。り。あ。り  
 あ。ら。ぬ。獻。山。の。信。侶。自。業。自。得。と。や。い。ふ。ん。又。吾。一。山。又。於。此  
 武。田。又。送。り。つ。べ。干。戈。ふ。た。た。ま。り。只。玉。家。辭。繼。と。あ。り  
 妙。法。の。功。力。と。ん。流。生。と。救。り。ん。と。欲。より。外。地。事。は。し。我。と

成

元

彼。遠。犯。暴。行。の。山。門。と。地。と。勢。ん。と。あ。り。明。若。佐。玄。公。あ。り  
 他。合。さ。り。上。と。云。と。こ。を。是。り。我。ど。も。今。是。と。對。云。の。と。あ。り  
 尚。山。の。彼。滅。と。い。ふ。と。と。あ。ら。ぬ。如。く。い。ふ。け。ま。が。あ。ら。ぬ。返。り。と。云  
 出。さ。ん。井。危。儀。の。一。変。せ。ん。と。あ。り。危。儀。も。危。ふ。ん。と  
 一。は。め。肩。と。頰。額。と。感。ず。も。為。例。也。か。と。空。淨。法。而。也  
 して。七。日。と。經。り。り。け。れ。ば。佐。玄。より。再。使。者。と。せ。せ。り。て。返。り  
 延。引。と。反。そ。ん。と。い。ふ。け。上。返。り。と。り。小。多。家。の。軍。勢。を。清。け  
 べ。死。と。て。嚴。ま。く。と。送。り。れ。け。る。危。儀。も。危。ふ。ん。と。柳。天。と。尚。山  
 己。又。法。滅。の。時。ふ。り。あ。り。他。一。と。云。又。あ。ら。ぬ。地。と。り  
 是。し。り。と。法。嗣。を。令。入。あ。ら。ぬ。車。何。れ。も。私。の。返。り  
 ち。り。が。じ。祖。意。又。但。之。の。外。き。と。と。は。山。の。信。侶。光



夜又神とた若よやぐく。仏法被却の大將と一筆又射  
 殘也と。由勢と後よりと由月の如く又強て。よのひみく  
 敵らぬ人の子業あやまらばく。誰とんまらばく。あま  
 の熱大おの口の中に射込らう。是とんてた若よ陪せし。九万  
 八千北春族。一同よ勢と揚て聲とあふ勢。山岳よつる後  
 たるふ勢るれ。あまらばく。老竹の種て。あまらばく。あまらばく  
 こそとんこれと。人よあまらばく。あまらばく。あまらばく  
 とて。同村よ倍り出る傍倍十人をも及びけ。又武田方の  
 士大おの中にも。同業とんて人。五六人もあけ。あまらばく  
 どあまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく  
 あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく

歎

報んとて。心とて。老竹十二人。甲府小赴。公事奉り。橋井  
 安藝守。今編降閑。武後三河守の二人又能て。智地難儀  
 の次第と云立て。ねひけふ。二人の面と見と。あまらばく  
 あまらばく。利屋がまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく  
 焼まらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく  
 んこそ。千万笑止まらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく  
 他山よあまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく  
 思及て。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく  
 等。是よ力をけ。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく  
 又能て。罷と取らばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく。あまらばく

BR



列戦功記二篇卷之八



列戦功記二篇卷之八

身延山の  
守護神  
出現の  
図

六



六ヶ嶽横又庄座の。其上高山冥護の時ありて。伽藍  
 無意のありて。一万部の法華經と轉讀仕はる。今ふ  
 又圓守の法武運長久と行はる。胡夕の法とありて。彼  
 其外不測の憂患と蒙りたる傍。傍も多し。いとて。彼  
 の次第をも云上して。頼ふ熱訴と述べて。信玄は公  
 守上て曰。却て平が頼ふふを。平の神社公園。神も世よ  
 仏も世よ。命と背は。即討は赤法べし。赤れども今更  
 法所系が熱訴。あまふ使われ。没例するふ。あまひず  
 方延山地移の。替延引。金る也。信玄と平は。後法大明神  
 と始。頼ふの神社と。信玄没例せん。何条別後の  
 有べ。況や日蓮法所が。此今の世傍。平是と。

絶えず

三

只今頼ふ日蓮が徒ハ。災殃と。我懐中て他宗と。継り  
 斥去地あり。や。も。これ。徒業と。結。平。先。奉。系。法。守。入  
 及と引。入。が。如。一。向。後。通。く。悪。人。と。其。あ。ま。ひ。一。人。も。跡  
 なく。山と。道。立。伽。藍。寺。院。と。も。被。却。して。他。宗。へ。の。見。繼。ふ  
 と。平。一。見。あ。ま。ひ。が。傍。侶。と。悪。而。も。あ。ま。ひ。信。玄。法。に  
 改。依。と。る。が。故。又。私。に。法。友。と。嚴。礼。さ。り。と。云。さ。れ。け。れ。が  
 三人の。赤。法。は。青。と。ん。身。延。山。の。老。竹。等。不。傳。説。は。れ。が  
 皆。赤。と。次。弟。と。云。上。て。焼。く。候。と。信。玄。久。き。を。ち。に。由。り  
 け。ま。び。一。山。の。欽。れ。ん。ん。と。由。り。復。大。事。不。由。系。して  
 妙。法。の。威。徳。と。謝。る。妙。山。岳。又。等。り。鳥。呼。か。る。靈。場。と  
 於。地。と。移。る。事。実。又。容。易。さ。ら。る。の。平。聖。年。に。い。り。

山岳の威徳と謝る妙

鳥呼かると靈場

之に依

越若上校輝虎入道謙信ハ。去年より隣国の諸將と入寇して  
 佐舌が領地を占領し。其の上洛を妨げんと欲せしが。元龜  
 三年四月廿八日。幸万俵の軍勢を帥で。信及長沼あぞ出  
 陣せしむ。時、武田四良勝將。佐舌の城を以て。謙信が  
 出陣を以てし。勢八百餘騎を率して。夜を以て  
 河川中流に馳向ひ。彼と六段を立てて對陣す。初故より  
 味方とは。軍勢十分の一も及ばず。其の上謙信の出る  
 たれば。鶴印と云。巖石を壓がめ。其の受小敵をさうも。さ  
 ら。これども。精氣血氣の強弱を。世も。屈せ。大文字  
 旗と。旗。よ。進。今。上。校。の。大。軍。に  
 蒐。入。ら。ん。ど。の。猛。勢。と。ど。競。け。る。高。下。上。校。謙。信。時。時。と。

武田四良勝將

九

之に依

信云は。齒腫と云ふ。人の發疼痛煩ふ。て。毎夜。去。あ。ど。及  
 む。れ。り。高。下。あ。て。今。の。信。使。の。靈。多。と。考。合。せ。て。諸。人。並  
 奇。美。の。懐。と。さ。せ。り。其。る。小。同。年。宣。正。月。廿。八。日。武。田。慶。光  
 將。越。中。の。推。名。肥。前。守。安。種。が。方。より。甲。府。小。羽。敷。と。ん  
 越。後。必。上。校。謙。信。信。及。長。沼。へ。出。陣。し。て。互。に。諸。墨。と。括。せ。死  
 と。て。肉。を。互。に。試。み。さ。す。る。在。り。互。に。油。の。み。ぬ。く。は。互。に。互。を  
 殺。せ。し。む。信。云。互。に。互。を。殺。せ。し。む。海。津。橋。の。所。に。互。の  
 如。く。中。船。ら。れ。て。幸。准。信。と。ぞ。せ。し。ま。け。り。又。形。る。軍。役。の  
 子。出。來。ま。ら。ず。由。人。又。幸。方。延。山。所。在。の。依。り。互。に。互。を  
 形。り。ふ。け。り。

上校謙信出張於長沼 并 武田勝頼武常三事

進め。故の機と察しと曰。今後任が多勢又怖まばりて。武田  
 猪形。微勢とい一我と憚らんと欲。争勇力あり。諸軍を  
 流石の任去らざり也。任於の若者哉と。大志不感愛して。遠  
 諸軍を命じ。改ねきて。越後をばしてぞ引返さるれば。法軍も  
 伎と返して引く勢を。猪形大又怒り。後任予若輩なりと  
 然り。侵又賞洞とい終と避。おんふるべ引退。そ無志なれ  
 先予若輩の軍配と試よとて。先進で只一騎。高と逸散  
 又飛せて追蒐たり。越後の方あり。上取隘一の勇士。甘槽  
 近江守系時殿又立て。怒りして引ぬけり。そ中より猪形武  
 者二騎。返して。竹は五七落合。虎介と名乗て。追来る者あり  
 微塵ふりて。くれんど。高うに荒云と。も無馬不超。ゆるる。残

漫  
海

猪形疾風の如く。京村。竹は五七落合。と合せ。猪形のひや  
 ぐとく。我ひが。忽竹はと突。落人。逸もつ。落合。虎介  
 而も。虎介。突。猪形。世も。撲。叱。勢。と。我。猪。先。か  
 交。陰。法。秘。術。と。並。の。雨。人。武。田。の。長。居。安。幼。加。賀。中。馳。射。て  
 落合。内。用。と。確。と。突。ひ。し。雨。を。四。良。猪。形。ま。と。一。勢。落。合  
 と。忽。後。玉。あ。ご。と。り。け。る。そ。源。又。上。取。勢。の。道。ふ。こ。そ。の。退。ら  
 け。は。猪。形。齒。嚙。と。あり。濂。佐。と。付。仕。る。も。要。余。る。上。取。が。武  
 勇。我。又。考。れ。り。と。曰。て。徐。くと。味。方。の。改。不。引。返。ら。ぬ。實。猛。將。を。ぞ  
 引。り。ける。け。付。付。さ。る。落。合。虎。介。と。い。う。る。考。と。あ。ら。ず。え。果  
 甲。は。又。な。で。武。田。道。遠。勢。の。被。官。あり。て。か。れ。る。は。武。勇。方。の  
 者。あり。ら。る。昔。幸。出。氏。と。争。論。と。交。り。身。形。不。敵。對。交

光電

あ及びけり。落合が水兵頭我うる不依て。葉嶽せしれり  
が。そは後殺免と蒙りける。因は倭兵長坂へたて木保密に路  
合と迫づけ。色はけふの辛海又負られし事。金丸  
平三良が。所をまゝ夜に。如何ある。而も度と敷く人の中  
けり。落合も先見と実と思ひ。己が水兵と見せれて金  
丸を討て。本意を遂げんと巧けり。己金丸平三良と  
りつ。今の土屋右衛門尉佐助が見あて。佐云。我輩の小姓  
あてあつる。早晩敵又宿願とけり。一夜宿願も  
又敵へと急を。落合は侍居て。遂に金丸を討た。千陽より  
逐電しける。以上甲越軍元三篇。後越後も逃上。上村家お仕  
病うじが。今日猪狩を役が。あふ討れけり。そは越報の女

釣

一  
下  
44

とる。西よりと用ひあても云合り。私て又。佐云も。甲府より  
あつる。越後の塩田切。明る山。乱入。而も放火せられ  
けれども。敵兵あて出やられ。佐云。川中橋も引返して  
海津子入城を。数日侍居り。甲府より返され。其  
勝報も。いづれ。而も伊奈あて取られけり

評曰

上村後佐。百餘の軍勢と帥を。一戦あも  
及む。退り。推し。またおらる者軍  
攻む。向ひ。機と察と。けん。要と。今  
武田家の武威。感する。日御東嶺。お非  
か。向者。光輝。お射ら。あ。越と。其  
ど。い。実。子。茶。頂。との。子。は。れ。を

下

織 字 下

武田たけだのたけだ確執たけだ并な信玄しんげん病やま事こと也なり。  
 于茲こゝ近幸ちかひと云い方かた海うみより甲か冑むすよよ来きて武田家たけだ又また勝かち系けいの士しま  
 が中なかつより尾お沢さわ中なかつ田でん家の内保うちたもてと能あた知しる者ものありて密ひそかか云いふ  
 様さまへ由よし上かみ総そう介けい事こと也なり。近ちか高たか志しと宗むね教のう也なり。中なかつ又また甲か冑むすれられ  
 るものども。是こゝろ皆みな中なかつ田でん家の係けい行ぎやう也なり。其その實じつ云いふべの  
 以もと。上かみ総そう介けいの内うち心こころの巧たくまといふべ。能あたかかんん死しせむむららるる也なり。

辨わへか

字 下

信玄しんげんのしんげん勝かち利り十じゅう一いちも是こゝろ是こゝろ也なり。  
 後のちより後のち討うつたへ。謙けん信しんの勝かち利り十じゅう一いちも是こゝろ是こゝろ也なり。  
 我われ共ども強つよ信しん遠とほくの出い強つよと空そら見みも亦また信しんしたるなり。  
 加かねね六む熊くまと猪いの丸まるが若わ衆しゆと被お成なり。小こ次し猪いの丸まるは長ながく  
 うう。若わ柳やなぎああてても後のちと云いふべ。私わが辱はづ辱はづ也なり。只ただか聞きふべ  
 寄よりて無な常じょう事ことと云いふべ。如ごとく如ごとく千せん常じょう武ぶと云いふべ。  
 以もと。上かみ総そう介けいの内うち心こころの巧たくまといふべ。能あたかかんん死し。  
 幣はてしと号ごう。後のち信しん智ち常じょう常じょう兼けん成なりと云いふべ。是こゝろ又また勝かち利りの  
 幣はてしと号ごう。後のち信しん智ち常じょう常じょう兼けん成なりと云いふべ。是こゝろ又また勝かち利りの  
 幣はてしと号ごう。後のち信しん智ち常じょう常じょう兼けん成なりと云いふべ。是こゝろ又また勝かち利りの  
 幣はてしと号ごう。後のち信しん智ち常じょう常じょう兼けん成なりと云いふべ。是こゝろ又また勝かち利りの

西にし 傲おご 侮おご



謙信

竹江國七

善合秀久



武田勝頼

上杉謙信  
 退陣の國

各社云紙を添てどけける。予外事師とされ諸侯よりも。小田家  
 の隠謀と告事同様をりけり。佐云遂小ふ杖のむと  
 されちれども。小田家ありはと憂る。予思をれらる。後小  
 て。むと政射きて。崇教亦以を又踏り。村小元毎四年改  
 元とて天正小移。予西月佐永より申す。擇かんと。佐云の政。西刑  
 小持越れ。十ヶ条の之附と呈て。踏云。其の越と。のべられ。予上  
 人。其の條。佐を。後身に。を。と。赤心と。し。と。送  
 らる。と。佐云。い。お。思。を。れ。け。ん。所。を。お。め。け。ら。れ。ん。と  
 野も。ま。ぎ。れ。の。虫。蜂。と。ど。送。り。れ。り。其。詩。又。曰。

一。事。違。ひ。我。若。佐。永。種。を。理。ん。佐。云。と。嫁。者。小。兵。威。を  
 由。頼。云。舟。堂。抄。を。依。小。す。也。而。を。と。叶。て。安。西。尚。方

申す

申す

申す

申す

申す

申す

申す

四ヶ条

織田

へ魂の取。近年形欲と存れ。遂僅漸と。と。れ。い  
 り。縦。の。蜜。裏。に。砒。毒。を。お。か。し。後。又。毒。石。を。作。り。し。小  
 似。る。若。哉。我。中。佐。永。予。茶。と。り。て。予。名。を。得。若。哉  
 也。と。い。ふ。も。生。小。却。を。れ。加。れ。又。ハ。果。報。予。を。發。在。是。利  
 義。昭。公。を。市。供。い。じ。と。洛。以。後。武。名。と。い。天。下。に。雷  
 動。寸。我。井。掘。き。故。心。を。て。表。裏。の。り。業。ハ。皆。黒  
 幸。取。末。る。予。茶。の。登。と。控。並。邪。の。思。又。申。り。聖。賢  
 の。政。と。及。ふ。た。あ。も。知。れ。ど。ん。天。下。不。放。され。軍。神。の。市。得  
 忽。又。蒙。り。結。句。予。高。の。大。小。己。が。肉。と。嚙。ひ。し。れ。分。命。と  
 空。教。夫。い。未。代。の。悪。名。佐。永。毅。を。ほ。く。い。向。後。い。茶  
 佐。云。と。佐。永。一。度。申。通。べ。う。ら。る。者。也。

川越力記二編卷之八

一十四

川越力記二編卷之八

一十四

現

お

大徳正伝云

織田

四月十七日

小室上総介より

とぞ書れり。押部介尾呂立内りて。小田家へ是と達り  
又足利家は和へても。内々伝云ふ心を考らるるが故。その  
密云と。小田家へ書れまきか。然と武田家へ使者  
とん。伝云と伝永。和賸ぬべし。換えとの。内教書と送る  
于使者へ。上野中勢を捕秀政也。伝云と。内教書と符  
也との。和賸の候ハ内消とせられず。却而伝永の獲魚を紀  
て。系部へ訴せられけり。小田家も亦け由と申て。伝云  
魚を救條也。同中勢を更秀政又就て。足利家へは格と  
られける。然ども伝永。おわらる。伝云へ使者を送り。言

織

行又陳謝して。崇教也。寔又足利家への訴状と云。雲泥の  
線。傳也。けき。伝云。愈々。其好曲と悪も。急ぎ小田  
家と。殊罰せんとして。正月七日甲子。身と出渡。隊  
伍。敷くとして。武威を迫。震い。被竹の猛勢あり。と  
おて。足りけり。何國ハ乎。大に伝云。遂は病氣再發。而けを  
せ。い。う。途中より。甲子。身と出渡。其。ま。よ。して。板。坂。法。宗。と  
始。諸。医。を。召。ま。し。けれ。ば。各。医。療。種。々。を。盡。し。後。あ。ら。四。死。の  
灸。ま。ど。ほ。く。ば。漸。く。快。方。あ。ぞ。及。べ。れ。け。り。一。門。諸。士。の。悦。び。入。ん  
ふ。り。の。り。く。猶。も。事。生。ま。れ。し。る。同。三。月。九。日。先。病。室。と  
離。主。殿。よ。入。り。て。庭。前。の。大。石。を。赤。糸。ら。れ。け。り。小。室  
侍。得。る。繼。攝。の。指。より。良。及。こ。ろ。び。う。ん。と。ま。を。を。暫

川内成力記二篇卷之八

二五



源入りておろしちりて  
 源山本の千指ともいふに。市井とていふはありあり  
 と。古きと口とさすれて曰。昔源三佐朝政。源山本とて  
 野とていふは。一ありて後成の竹も朝政の心よりさす人  
 ありと。ゆゑに一はあり。実又ふあ等式すども。感情浅き人  
 こそ見えぬ。ゆゑに都近くは互人の云換へ云柴。仕敷せ  
 一りり人。まことすども。あられなく。末代すども。名と愛  
 せらる。嗚呼。予。近都は朽果んやど恨する。いそや世を互  
 うち。於又坐り。万葉の君の総統を稱しなり。四海の  
 逐浪を一時は押鉄志んきんと安んまうんとて。作  
 然して云うれ。總て。御酒宴を催されけり。翌日ふ

恨死

ふち

至て上洛の波觸とて云われけり  
 後去上洛出政并る場。佐房武常之事  
 然るに。佐房の玉司。小島中納言具茂卿あり。後考ると  
 長尾を尾石見守。甲身より来着見。迄故由什麼と云れ  
 ば。佐去公早く上洛を企られて。小田上総介と妹野ありん  
 こと。ゆゑに。佐房を又遊へ。後海の場。雨と云う程  
 あり。佐房而途中へ入ると。ありけり。作小島家の中  
 于先村上天皇。第六の皇子。二品中勢卿を平親王の  
 子。久我方大佐竹房公七代の末孫。持大御云。雅家公始  
 佐房の玉司と任す。小島殿と号。け雅家公の弟孫。小島  
 准后入。乃親房。兄弟あり。婿男へ。奥の玉司。持中納言

列傳功記三篇卷之六

十一







烈陣功記二卷之八

武田勢  
途中  
壯觀  
の圖



烈陣功記二卷之八

十八



織田

歩率合て八百餘人として出陣して... 唯今亦て出られぬ高岡天下と... 今天下泰平のお... 大考又呼より作。八百餘人と魚鱗又列陣。地籠の... 先は推立。一万餘の大敵。此も... 蒐り来れ。信永... 取れぬもぬれぬ。... 大羽羽の... 改より崩立て。右佐左性又逃れ... 中の軍勢六十騎又。是初佐良右の尉が六十騎と百十騎の

織田

早雄... 我先みと追蒐... 返り者一人も... 三十七人討死... 見ぬのもせ守... 勢を引上... 遂は落... 秋山が功を賞せられて。刈秋山... 岩村の城代と為れ

采配

川口カバ...

七一

繪本烈戰功記後編卷之八畢



ありて

土波を山等の仕をみて。並又上方へ向りんとて。旗を列。軍隊倍と懸て。推し出。英氣乾坤。小亮は威風四方とるびせ。行路の明も自備べく。陣甲軍一代の精神。各効功と顯て。武名と青史と尚め譽とる。孫又傳らるるに付又とて。士率又あると云をまづいふ者。加えたる傍又踏踏て軍は衣と見えたる者若若男女のしるすも。実や四海の擾乱とあり。革創の功とて。後とんこいけ大羽の學と出づるべと。即ちねぬるもさるりけれ

東都川關先生著

早引人物故事

全部二冊

同 誹林沾凉大人著

近代世事談

全部五冊 合卷三冊 後篇近刻

一名 萬金産業袋

町家 高賣仕法大成

全部六冊 合卷三冊

此書は本朝の昔より近世に及ぶ名將志士及び侍哥連汝俳諧の達人風流俳優名媛の事や世は名も人々を集めての作況時代及び世は名も人々を集めての作況安く記し故人と搜索とるは後小徳つるのこい書は東山殿より東兵服食菓草木花鳥歌萬物近代末船車醫術流書画侍歌連俳香茶花挿巻及び芝居木の起原人海雜事年中行用故実ある何の順より初す。此書は町家此書は満職此秘密真像よ。町家外端國乃産物いす又ホも。諸工商の重宝と。後篇ふ

手嶋堵菴先生述

女訓よんせんくん女前訓よんぜんくん種たぐひ

姿見よんみ繪え全一冊

録田柳弘先生作

心學しんがく五則ごそく

全壹冊

六樹園大人譯りやく前篇六冊

通俗排悶錄つうたふぱいもんろく

漢齋英泉画かんさいえいせんが後篇六冊

浪速書肆

心毎指通持芳所編

河内屋茂兵衛藏版

東都葛飾戴斗画

花鳥画傳かちょうがでん

初篇しよへん全二冊

一勇齋國芳画

一勇画譜いちゆうがふ

全一冊

北齋爲一老人画

繪手本水滸画傳えしよほんすいけいがでん

全一冊

柳川前重信画

繪手本水滸画傳えしよほんすいけいがでん

全二冊

此書ハ女子七又ハ教由ニシテ第一ニ成徳ニ

考ル真操ノ方ト失テ實素即後守リモ心

志トシテ洗ハ精礼ノ式化法ヲ教習女盟ニ有テ

衣服ヲ着ル心ヲ外女ハ重宝ニ事致テ柔

心トあり著述セシ是餘人及別誌ノ言ナシ

人倫の正路と云ハ持敬積仁知命及知長貴

れ五則よりれども學ぶべきは是と知るべきは

先生及別の人におけるまゝ平らむと和解説此時

より著とせん仁義の道と知り自ら修養節儉

懐ひ立身出世と云るは後條せし世に立身は

此書々々花鳥草木は各何れなりと云

輯しこれハ画と云ふは雅更しと油と需

どと云画はと云ふはと重宝の画手本あり

國芳多年此工夫と云ふは新奇妙業の事

えしよと云ふは画きたるは普通

画譜の扱ふ雲泥の別ハヤと云ふは

りあり画本なり

此画ハ画の老人の手にて水滸傳一百八人乃

者像と丹精凝細等々此に画手本第一書なり

此画ハ翁の柳川先生に傳りて水滸傳

一百八人乃英雄と云ふは此におのてこれ

附く書蒙此越画と好む人の便あり



葛飾戴斗画

# 英雄圖會

全一冊

一勇齋國芳画

# 三國英勇画傳

全一冊

# 忠臣銘々画傳

全一冊

漢齋 英泉画

# 畫本錦之囊

全一冊

# 萬職圖考

初篇二篇 三篇 四篇 五篇 全五冊

大阪書林

河内屋茂兵衛 梓

# 都乃手ぬり 全一冊

六樹園大人著

江戸の浮世繪をなすに地の中にも  
浅州の両玉に比しあざむけありき  
或は文として見るがごとくふくま  
ざる名文あり

# 先哲像傳 全四冊

徳齋原先生著

先哲名家の事蹟のそと省像の  
傳をたのむたも古人の省像に對する  
時の愛の逢ふ心して其人の徳も想像  
するに似たり此編の學者書家をに  
聞人雜誌のしるすまで由来正し  
省像と真跡と集り各小傳をそと

# 新著門集 全十冊

此書をいそぐ古くより  
何れも字の紙ありきあり  
とゆゆゆの珠悦喜集  
を實録をれを集中  
おの性名居下年曆を  
洋ふありきし古今  
未曾有此珠書あり

# 名家畧傳 全四冊

山崎美成大人著

先哲叢書近世時人傳よき  
世よ名なききこえ一篤行の學士  
遠乃文人歎くはありき  
言ゆと集録せし書あり

淡洲樓馬大人評

関卷百笑 全二冊

此書の馬馬大人の集る処奇  
物多し今昔此物に  
作てを若男大にり歩  
かふふふはけうたまは長田  
消し去夜の采帳と云のぐ  
以上もこれ一書に実不是と聞  
えれを秋不笑と権やゆゆ  
嚴格の人々も絶倒せざる  
りきり一決して匠奉百笑也  
疑ふるは遠近をありや

浪華書房

心無稿通博勞町角

河内屋茂兵衛藏板

松亭金水著

大平樂皇國性質 全二冊

此書を儒者と俳者の説は異  
あると云ふを説はるるを古今  
風俗の變化ありしを神  
籍に成りけるは漢よりといふ  
後成りしをぞんじ三味線  
悦豪富笑士と悔る主婦喧  
やりのむは江戸の嘆云その外  
筆てを之に道何これとを雑語  
此も小説を述けきり孫書より

